

練馬区立小中一貫教育校推進委員会

第4回 推進委員会 要点記録

開催日時	平成20年1月9日〔水〕午前9時30分～11時30分
開催場所	練馬区役所本庁舎 12階 教育委員会室
出席状況	出席11名 欠席3名
傍聴者	2名
次第	案件 議事録（第3回）の確認 資料の説明 小中一貫教育校の基本方針の検討 配布資料 ・練馬区の小中一貫教育カリキュラムの特色（案）（資料1） ・小中一貫教育カリキュラムの特色と 小中一貫教育校設置の意義と効果との関連（資料2） ・他区市の小中一貫教育カリキュラムの特色（資料3） ・中央教育審議会教育課程部会 「教育課程部会におけるこれまでの審議のまとめ」（資料4） ・武蔵村山市小・中一貫校に関する情報（資料5） ・教育再生会議の第3次報告に関する情報（資料6）

会議の概要

委員長

第4回練馬区立小中一貫教育校推進委員会を開催する。

まず、前回の議事録の確認をしたい。

事務局

議事録は事前に確認をいただき、手元にあるのは校正済みのものである。お気づきの点があれば、指摘いただきたい。ホームページ上で公開していきたいと考えている。

委員長

早速、小中一貫教育校の基本方針の検討に入る。

カリキュラムについて3回ほど検討する予定である。

事務局から資料の説明をお願いする。

事務局

(資料1～6に基づき説明 省略)

委員長

練馬区の小中一貫教育カリキュラムの特色について検討し、その内容については、素案の教育課程の編成に入れ込んでいくことになる。

今日はいろいろ意見をいただきたい。フリー討議をしたい。特色づくりは小中一貫教育校のポイントになるので、次回までに提案をいただき、議論を深め、最後にまとめたいと考えている。

学習指導要領の課題として7項目あるとのことであった。一方、練馬区として必要度の高い教育課題について、特色を4つに絞り込んだとのことであるが、その点について補足説明をお願いする。

事務局

どのようにして特色を4つに絞り込んだのかということである。

どのような子供を育てていきたいのかということと児童・生徒の実態から必要とされる課題は何かという2つの観点から選定した。

様々な先行事例や中央教育審議会で示された7項目を参考にして検討した。

すべてを網羅することは困難であるため、先ほどの2つの観点から4つを示させていただいた。

委員長

表現力の育成についてであるが、武蔵村山市では言語力の育成とある。概念の範疇が異なり、表現力のほうが言語力よりも広いものと思われる。

カリキュラムづくりの中で具体的に検討していくことになるのであろうが、どんなことをどんなねらいでやるのかということがわかりにくいので、調べ学習という話も出ていたが、日常の教育活動や学習指導要領の中で具体的に示されている例示を用いてはどうか。

心の教育についても道徳だけであるのかということがあるので、カリキュラムづくりの対象となる像がもう少し見えると良い。他の自治体でも心の教育という表現が結構あるようである。

健康・体育であるが、体育というのは教科の名称であり、健康はまた少し違う。横断的な特色の表現であるならば、健康・体力づくりという言い方のほうが良いのではないか。

キャリア教育は、こういう形で表現されている。

委員

今、IT化が進んでいる中で、子供たちのポキャブラリーが非常に乏しくなっており、

書く力、読む力、伝える力など様々な面で課題がある。たとえば、家庭においては、核家族化が進行して会話がなげない。したがって、どちらに包含されるのかということはあるが、今日の子供たちの実態から、表現力よりもコミュニケーション能力のほうがわかりやすいと思う。その中で表現力が出てくると思う。確かに、意思の疎通、意思の伝達という能力が非常に不足している。安易にインターネットやメールでの発信はしているが、言葉として発信することは非常に苦手である。人間社会において対峙関係が一番大事であるから、コミュニケーション能力は、子供にとって必要な能力であると思う。

特にこれからは、国際化の中でプレゼンテーション能力がますます必要になってくるし、日本人が一番不得意とする部分である。それも表現力の中に含まれてくるので、コミュニケーションのほうがピタッとくると思う。

委員

特色として4つ挙がっているが、まず、この前提として、ベネッセの調査などで、欧米、中近東、アジアの諸国と比べて、日本の若者、青少年が、自己肯定感が極めて低いということがある。学力は高いし、立派な行いをしているという定評があるものの「自分は大したことがない」、「自分の将来にあまり期待をしていない」といった自己肯定感が低いという現状がある。現実の問題として、不登校、引きこもり、いじめ、問題行動といった面がある。

終戦直後は生きるために必死で、人の物を奪ったりとかいった犯罪が多かった。今、青少年の非行は少なくなっている。それは、豊かな時代になって、人を押しのけても、人の権利を侵害しなくても生きていけるようになったからだと思う。

一方、そこから出てくる課題とすると、フリーター、ニートという言葉があるが、意欲が減退してしまつて、定職につかない、社会参画ということに消極的であるという面がある。PISAの調査で、読解力が低いということが問題になった。当初、皆、日本人は読んでこれは何かを理解することは得意なはずだ、学力も点数は高いはずだと思っていた。ところが、リテラシーと英語で言うが、読解力が指しているものは、何が書いてあるのかわかるということではなく、資料を読み取って自分なりに理解して、それを分かりやすい方法で人に説明することができるということである。それは、表現力のことである。そういう点が低いということが、分かってきた。

表現力の育成であるが、今会社では、ほとんどプレゼンテーションで説明しないと自分の企画が通らないという時代である。自分の子供から聞いた話であるが、大学のほとんどの授業が、パワーポイントを使ったプレゼンテーションとのことである。

今の時代に生きていく子供たちにとって、どういったものが必要なのかを考えたときに表現力、指摘のあったコミュニケーション能力、自分の考えをプレゼンテーションして相手に理解していただくという点があがってきた。また、豊かな時代で、人を押しのけたり、悪いことをしなくても生きていける時代、そういうことからフリーター、ニートというこ

とがあるので、正しい勤労観ということで、キャリア教育という点、それから心身の発達ということで問題があるので、健康・体力の面、心の問題、そういったものを教育指導課の中で数十項目こういふことはどうだろうというものを精査する中で、最終的に練馬区の学校の実態や区として将来的にこれからの時代を生きる子供たちにはどういう力を身に付けてほしいのか、ということで絞り込んだのがこの4つということになる。

話は前後するが、この4つは手段に過ぎないと思っている。その意味は、この4つをやれば完結するというものではない。私は、中学校で英語の教員をしていた。それから指導主事という職につき、初めて小学校にも訪問した。そこで思ったことは、小学校と中学校は、全然違うということである。小学校は、子供中心に活動を組み立てていく。中学校は、内容が高度なので、どうしても教科の内容を中心に進めざるを得ない面がある。問題点は、お互いに理解していないという点である。小学校の先生は、自分たちが手塩にかけた子供たちが中学校に入ってしまうといろいろな問題行動を起こしたり、不適応を起こしたりして、どうなっているんだというような思いが強い。一方、中学校の先生は、九九とか読み書きもそうであるが、基礎的なことが身に付いていないから中学校の教科書の内容に入れないということで小学校の先生に対してもっとしっかり教えてくれないと困りますよという気持ちがある。私の印象は、お互い大変なところを理解していないということである。

たとえば、小中一貫教育校も考え方としては、同じ9年間の連続の中で、校舎が1つであったり、つながっていたり、近い関係で一緒に教員の校内の研修ということで、9年間の子供たちの実際の姿を見ながら、学び合いとか校内研修とか、こういう状態だからこうしよう、7、8、9年ではこういうことをやるから、4、5、6年のときはこういうことをやっておこう。将来、ああなるのだから今のうちにこういうことをしておかなければいけない。子供の具体的な姿を見ながら研修が深められる。したがって、教職員の意識改革ということにもつながると思う。そういうことを通じて、学校改善とか、一人ひとりの子供たちがこれからの社会の中で、よりよく自分を発揮して自分の力を高めていける。社会に出たとき困らないようにする。そういった視点で、小中一貫教育校について考えることはできないのか。そのように考えたわけである。

したがって、そういう観点から共通の視点でこの4つの項目に取り組むことによって、子供たちをよりよく育てていくという気持ちで、その学校が前向きに進んでくれればありがたい。そのための切り口、手段としての提案だとお考えいただきたい。

委員長

小中一貫教育校の設置の意義や効果を踏まえて、発言をしていただいた。

表現力は、コミュニケーションの基盤であるとのことなので、単純に解釈すれば、表現力がコミュニケーション能力に包含されるということなのかなと思われる。そういう意味合いから、この特色はコミュニケーション能力というような広い意味のほうが良いのではないかというのが趣旨かと思う。

委員

国際化が進展していく状況の中で、今後、日本が1番交流を深めていくのは中国であろう。ただ、英語教育が多いが、バイリンガルの教育、外国語の勉強が広まっていくものと思う。そういうこともあり、コミュニケーションはどうかなと思った。

委員長

4つの特色については、理解できる。

カリキュラムの特色づくりを重点にすることで、教科等の学習に基づく「確かな学力」の向上の基盤とするんだという考え方と表現力の育成、コミュニケーション能力の育成という言い方との関係はどうなるのであろうか。

委員

カリキュラムの考え方に、練馬区は確かな学力を向上させるとある。ところが、編成方針では、生きる力になっていて、確かな学力と豊かな心と健やかな体の3つをバランス良くということを考えている。どこをねらっているのかが、ちょっと理解できなかった。

カリキュラムの考え方にある確かな学力は生きる力のことを言っているのか、練馬区は学力向上だけを重点にねらっているのかが、ちょっと分からなかった。

委員長

カリキュラムの考え方より編成方針のほうが幅が広いのではないかと趣旨の発言かと思う。

事務局としては、どのように考えているのか。

事務局

確かに指摘をいただき、しっかり読み返してみると、編成方針のほうが広がっている。これを作成したときに、考えたこととしては、4つの特色をしっかり取り組むことによって、確かな学力の向上の基盤にしていくということがあった。もちろん、豊かな心、健やかな体も含めて考えてはいるが、表現力やコミュニケーションは学習していく上でも十分ベースになるところであるので、1番最初の考え方のところに示させていただいた。

しかし、指摘をいただき、少し整理をしていかねばならないなと感じた。

委員

表現力の育成であるが、表現力には、言語事項だけではなくて、絵、ダンス、歌などがある。身体表現もいろいろある。それをどのように含めていくのか。それとも、言語事項にくくっていくのか。どのように表したら良いのか。

事務局

具体的に作成するのは、来年度以降になるが、少し幅広くとらえておいたほうが、作成しやすいのではないかとということで、ぼかしたところがある。

ダンス、体育での表現活動、絵の作成もあるかと思うが、ここでは、コミュニケーション、言語活動を特に取り上げた。発達段階に応じた各学年ごとのカリキュラムを作成する中で、もっと練馬区として取り組めることを盛り込んでいくことが可能ではないかと思ったので、ぼんやりさせた。こういった表現を入れたほうが良いのではないかとということであれば、意見を欲しい。

委員長

横断的な課題ということであるが、この特色づくりは、教科に準じて表現力育成の時間を作ってやっていくという理解をすれば良いのか。他の自治体では市民科といった形で時間設定をしているが、特色づくりはそういうことなのかなと理解している。

事務局

本区の場合には、特区をとって、たとえば表現科といったような新しい教科を作っていくわけではない。学習指導要領の枠組みの中で、進めていきたいと考えている。教科は、教科としてある。それ以外の道徳、特別活動、総合的な学習の時間などを利用して、この4つの特色について、取り組んでいく。たとえば、表現力を取り上げていくと、国語、理科、社会などの教科の中にも当然表現力を高めていく部分が出てくる。それを新しい教科としてではなくて、9年間を通して見ていく中で、発達段階に応じてどこの段階ではどういったことを身に付けさせることができるのか、ということを変更して見直しをしていくことになるかと理解いただきたい。

委員長

以前、教育指導課長からも道徳、特別活動、総合的な学習の時間の活用の中で、特色づくりをというような発言があった。その辺が分かるように、編成方針の中に盛り込んだらどうか。教科、領域と指導要領、教育課程との関連の説明が必要かもしれない。

事務局

カリキュラム、教育課程といった文言を学校関係者は使うが、保護者、区民にその辺のところを明確に解説できて共通理解があると、論議が深まると思う。

今、事務局から説明したことについても、特色について他の区市と比較すると、これから次の段階はどうなんだということがある。たとえば、品川区は市民科のような明確な教科がある。町田市や武蔵村山市は特区を取らないで、どのようなステップを踏んだのかということが、本区では参考になると思う。今後、どうなるのかということも踏まえて

協議しないとイメージがわからないが、次のステップとして、カリキュラム作成委員会が設置される。本区ではその手順があるということである。

委員長

カリキュラム作成委員会の中に、分科会を設けるのか。

事務局

特色ごとにカリキュラム作成委員会を設定する。たとえば、表現力の育成の作成委員会で、具体的にカリキュラムを作成していくということである。

委員長

その辺について、もう少し具体的に書いてあると良いと思う。

何もかも書き込んでしまうということではないが、子供の現状をとらえていただいた上で、発言をいただきたい。

委員

上石神井小学校と上石神井中学校の連携をやっている校長として、これを基に実践するように言われたときに、どうすれば良いのか。そんな立場で、拝見させていただいた。

カリキュラムの考え方の中で、確かな学力の向上なのか生きる力なのかという指摘があったが、私は、生きる力という概念が是非とも必要であると思った。

カリキュラムの編成方針で、新しい教科は作らないということについては、賛成である。小中一貫教育校であるので、9年間の連続性を持たせた中で、4つの特色をどのように具現化するのかということをしっかり述べる必要がある。地域の中で、9年間かけてこういう子供を育てるんだ。そのためのカリキュラムを編成するんだということを強く言わなければいけないだろうと思う。

カリキュラムの特色の表現力のことについては、私は理科の教員であるが、理科の立場から言っても、子供たちに少し欠けていると思う。4つの特色は、本校の子供たちに全部欠けていることなので、とても良いと思う。

細かい部分で、更に追加をする必要があるのかなというふうに思う。理科でいうと、データを分析、グラフ化して、それを考察して説明するといったことも表現力になってくる。心の教育では、自己有用感が小中の連携、一貫校の中では非常に効果的な項目になると思う。そういったことを是非入れていただければありがたい。

具体的な指導場面が是非必要であると思う。カリキュラム作成委員会でやっていくことになると思うが、今、私のところでは、小中で一緒にあいさつ運動に取り組んでいる。9年間かけてあいさつできる子を育てるという非常に単純な話である。我々校長がこれを見たときに具体的な指導場面を思い起こして、先生たちにきちんと説明できる資料を作らな

ければいけないと思う。

大きな方向としては、すごく良いと思う。カリキュラム作成委員会の中で、より具体的にやっていく必要があると思った。

委員

この4つの特色は、現代の教育課題だと思う。小中一貫教育校にかかわらず、どこの学校でも教育課程に盛り込まなければいけないことだと思う。特色を出すということは、容易ではない。4つとも成果を見えるような形にするのは、校長としてはかなりしんどく、荷が重い感じがした。

私ならば、軽重をつけて、全部同じように扱うのではなくて、どれかを主にしたいという気持ちがある。いろいろなやり方があると思うが、たとえば、キャリア教育を主にして、他の3つを従にするというやり方もあると思う。

本校の6年生が、学区域の15軒のお店に3人ずつ行って、2時間だけだったが、職業体験をしてきた。「いらっしやいませ」と挨拶をしなければいけないので、表現力にかかわる。お客さんには、感謝する気持ちがないと笑顔が出ない。ずっと2時間立っていたので、子供が疲れてしまった。精神的な疲れもあるが、ずっと立ちっぱなしで仕事をしたので、体力もないといけないなというような感想を持って、6年生が帰ってきた。

すべて同じようにやるのではなく、1校でやる場合は、どれか1つを主にして、後は従にするとか、もし2校作る場合は、2つずつぐらいやってみるとか、そんなこともできると思った。

事務局

確かに具体的な指導場面が見えないとぼやけてしまうところがあるので、少し具体的な場面について考えたいと思う。また、各委員の立場からこういった場面があるのではないかということを持ち寄っていただくと大変ありがたい。

4つの特色すべてについて成果をあげていくことは、理想的であり、大切なことだと思う。その1校だけのものを考えていくというよりは、少し汎用性のあるものを作成しているので、その成果を練馬区全体に広げていくということも考えている。

この特色をベースにしながら、小中一貫教育校がどのような教育課程を編成していくのかは、校長先生の考えやどこに重点をかけるのかということも必要になってくると思う。

委員

小中一貫教育校については、副校長は通常小中で2人のところを3人にしようといった人的措置がある。また、小学5、6年生には教科担任制を導入したり、施設面でも小中を近づけるといった特別な措置がある。

それはそれでやっていき、そして成果が出た段階で、他の学校にも広めていくことにな

る。そして、他の学校でもできることということで考えていけば、その辺はクリアできるのではないかと考えているところである。

委員長

小中一貫教育校での具体的な適用と練馬区全体への小中連携への反映の2点について、カリキュラム作成委員会で検討していくということが素案の考え方の中に示してあるので、できる限り有効に活用できるカリキュラムづくりということで、理解いただきたい。

委員

生きる力ということの考え方であるが、今、子供たちの周りでは、情報があふれて、選択肢が増え、社会がどんどん変わっている。そういった中で、選び抜く力の基礎をつけておくということは、すごく重要なことではないかと思う。

資料2の小中一貫教育校設置の意義と効果の豊かな人間性や社会性の育成の中の社会性という部分に含まれているのかもしれないが、子供が何を選び、何を選ばないのかといった力をはぐくむということも念頭において、カリキュラムを作成できれば良いと思う。

事務局

お子さんを見ての実感からの発言かと思う。

情報が氾濫し、物が非常にあふれている中で、自分に適したもの、また課題を解決するためにはどれを選んだら良いのかという力を身に付けさせることは、非常に重要なことであると思う。まさに、それが自分で生きる力につながると思う。

そういった意味からいうと、たとえば、情報教育の中で、氾濫する情報の中からどういったものを選定していくのかというような力、それと練馬区の例で言えば、表現力の中に情報教育を入れ込んだり、また、キャリア教育の中に情報に関することも含まれてくるので、そのあたりのどちらかに入ってくるのかなと思う。

委員長

子供たちが、そのことをどこまできちっと受け止められるのかという話である。

果たして選択を全部きちっとしてきたのか、その時々目標を持ってできたのかということについては、率直に言って、私はあまり自信がない。

事務局

まさに選択という意味では、職業を選択していくとか、自分の目的を明確に定めていくということでは、キャリア教育に非常にかかわるところである。

委員長

今の関連でいくと、体育について何かあるか。

事務局

先行実践の中から、健康・体育は見当たらないので、練馬区の売りになり、特色として打ち出していく1つになると思う。

新体力テストが実施され、特に小学校のシャトルランとソフトボール投げの力について、全国、東京都と比較したところ、練馬区は少し低い状況にある。中学校では、持久走とハンドボール投げについて課題が見られる。そういったところから、練馬区特有の課題も見えてきているところもあるので、9年間の長いスパンの中で発達段階に応じて設定をしていくことは、非常に有効なことだと思う。

委員長

新体力テストということで、健康、体力を作るといふことの大切さはわかる。

社会の変化への対応の観点から教科等を横断して改善すべき事項の中には、食育、安全教育、心身の成長発達についての正しい理解などがあるが、どうか。

事務局

選択能力ということ言うと、健康・体育に関しては、たとえば、自分の体力で劣っている部分でどのような運動、種目を選ぶのかとか、食育では、自分の好き嫌いばかり言っているのではなくて、嫌いなものでも栄養素を考えて食べるようにするといったことがある。4つの特色のすべてにおいても、そのような視点を取り入れながら、次の段階でカリキュラムに反映させていくことになる。

委員

個性重視とよく言うが、どのような形で個性を重視していくのかというところがよくわからない。個性重視の考え方は、とても大事なことだと思う。

たとえば、授業を展開する上で、学習集団や生活集団の規模をどうするのか、TT（チームティーチング）、小人数を導入するのか、特別活動の部分で個性を育てていくのかといった文言がもう少しほしいなという感じがする。

事務局

これまで検討してきた素案の3小中一貫教育校設置の意義と効果に「練馬区が設置を計画している小中一貫教育校は、児童・生徒が9年間の一貫した教育課程と学校環境のもとで学ぶ場を提供することで、義務教育の多様化を推進し、児童・生徒一人ひとりの個性を重視した教育の充実を目指すものである」とある。そこから、個性重視ということを示さ

せていただいた。

小中一貫教育校を設置していくところで、一人ひとりの個性を重視していくんだということを受けて、カリキュラムのほうでもそれを書いた。どのように個性を大切にしていくのかということについて、もう少し明らかにしていかなければいけないと思う。

委員長

小中一貫教育カリキュラムの考え方と編成方針の整理が必要であると思う。

個性重視については、カリキュラムづくりの中で、こういう視点が小中一貫教育校における目標の原点になる、といった表現になるのではないかと思う。

ここに書くとき少しぼけてしまうので、書き方の工夫が必要になってくる。

委員

練馬区として必要度の高い教育課題について、特色を設定するとある。その中で、具体的に4つの点について特色を出そうということである。

なぜ、練馬区では必要度が高いのかということの背景について、言及できればと思う。

事務局

どのような子供を育てていきたいのかということと練馬区の子供の実態から必要な課題ということを必要度の高い教育課題ということととらえた。その辺の説明を文言に含めていく必要があると思う。

委員長

こういうデータによるとこのような子供が多いから、こういうことが課題だというようなものがあるのかという趣旨である。

子供を類型化し、課題が何であるかということの数値で表示するのは、現実問題として難しいと思う。各校長からこういう特色についての取組は非常に重要である。日々、子供を見ていて言えることなのだという話があった。そういうことが必要度の高いという言葉になっているのかなと思う。必要度の高いという言い方をもう少しわかりやすい表現に変えるのは良いと思う。

委員

4つの特色は、小中一貫教育校でない独自の学校の大きな課題でもあると思う。

この4つの課題が小中一貫カリキュラムになるということとをここでしっかり書く必要があると思う。つまり、独自の学校の特色ということではなくて、小中一貫教育校としてこれを達成しようという背景がとても大事なことである。

したがって、多くの校長がこれを見たときに真っ先に目に付くことであるので、9年間

を見通し、連続性を大事にするという立場で、はっきりさせたほうが良いと思う。

委員長

一言で言うと、なぜこの4つなのかということカリキュラムの考え方が編成方針の中でわかりやすく述べるということである。小中一貫教育校を作ることの意義の中にも出ているのであろうが、なぜというところを総論として書く必要があるという趣旨である。

委員

特色を設定するという言葉がちょっと気になる。先に特色を設定するというものなのか。小中一貫教育校でないとできないことを行うことでより充実させる。そのために、何らかの目標を立てて、小中一貫カリキュラムを作成するのではないか。言葉が逆になっているのではないかなという気がする。

小中一貫教育として目指すものはこれだから、結果としてこういう特色になったんだというのならわかる。

委員長

「特色を重点にしていく」という言い方であるが、何となくはっきりしないところがある。

要するに、何を重点にして小中一貫カリキュラムを作っていくのかということであり、結果として特色だということであろう。

事務局

確かに、カリキュラムの特色が突然出てくると、そのような印象を受けるかもしれない。しかし、基本的な考え方の中に、小中一貫教育カリキュラムの特色を挿入することにより、全体の流れの中でよりわかりやすくなるのではないかと考えている。

委員長

いずれにしても、わかりやすい形にしていきたいと思うので、よろしく願います。

終了予定時刻になったが、事務局から何かあるか。

事務局

事務局の案を今一度見直していただき、意見をいただきたい。言葉で説明しにくい場合は、ペーパー等にまとめていただき、事前にお送りいただくか、当日お持ちいただきたい。形式は問わないので、可能な範囲で、意見、代案があればお聞かせ願いたい。より良い小中一貫教育カリキュラムの特色ができるかと思うので、よろしく願います。

事務局

三鷹市の研究発表会が1月30日(水)に予定されており、申込期限が1月18日(金)である。参加を希望される方は事務局まで連絡願いたい。

また、上石神井小学校と上石神井中学校の研究発表会が、1月22日(火)に予定されているので、紹介させていただく。

次回は、1月24日(木)、午前9時30分から11時30分まで教育委員会室で予定している。

委員長

今日の会議を終えさせていただく。お忙しいとは思うが、次回もよろしく願います。
ありがとうございました。